

## 第2章 本居宣長『古事記伝』⑥

前おやさと研究所長  
井上 昭夫 Akio Inoue

## 第六節 「から」と「にほん」の二分法の図式

わたくしの関心は、言葉の概念解釈だけではなく、この「から」と「にほん」の比喩的表現から、現代がもつめるどのようなあたらしい実践思想が産出できるかということなのである。「じきもつ」(食物・金銭)をもとめて、国際市場は各国がしのぎをけずり、弱強国の「高山」「谷底」がいりみだれ、それぞれの「にほん」の政財界がそれぞれの「から」によってゆりうごかされている。宗教教団組織もその例外ではありえない。

このような現代の世界的視野から「から」と「にほん」の地平を俯瞰すると、「から」的思考が「にほん」を「ままにする」ことに対する神のきびしい戒め、立腹、残念、「かやし」の宣言がくりかえし『おふでさき』に出ていることに気づかされる。それは逆転して「にほん」のなかに「から」が存在しているのではないかという疑問であり、批判としてもうけとれる。かかる視点から解釈すると「これからは唐と日本の話する なにを言うとも分かりあるまい」とある第二号31番のお歌は、天理教内外にかかわらず、場所や時代をこえて普遍的・未来永劫的な思想をもっていると理解しなければならないであろう。

松本滋は「「から」と「にほん」一本居宣長のからごころ批判との関連から」というテーマで『G-TEN』41号、特集「おふでさき」の世界(天理やまと文化会議)において「からとにほんの二分法の図式」について注目すべき比較論を展開している。まず『古事記伝』にみられる宣長の関連する思想紹介から入り、「から」「とうじん」にたいするきびしい戒めの言葉をあらす次の『おふでさき』を引用している。

とふぢんがにほんのぢいゝ入こんで  
まゝにするのが神のりいふく (二一-32)  
いまゝでハからがにほんをまゝにした  
神のざんねんなんとしよやら (三一-86)  
にちへに神の心のせきこみハ  
とふぢんころりこれをまつなり (四一-17)  
いまゝでハにほんかからにしたごふて  
まゝにしられた神のざんねん (四一-128)  
いまゝでハからやとゆうてはびかりて  
まゝにしていたこんどかやしを (十一-12)

つづいて松本は、「から」が「にほん」を「ままにする」ことにたいする神の立腹、ざんねん、「かやし」の宣言にたいして、「にほん」を強調する『おふでさき』を七首あげ、「から」と「にほん」の二分法の図式をあきらかにしている。

このさきハにほんがからをまゝにする  
みな一れつハしよちしていよ (三一-87)  
いまゝでわからハゑらいとゆうたれど  
これからさきハをれるはかりや (三一-89)  
にほんみよちいさいよふにをもたれど  
ねがあらハればをそれいぞや (三一-90)  
にほんにもこふきがでけた事ならば  
なんでもからをまゝにするなり (五一-32)  
にほんにハいまゝでなにもしらいでも  
これからさきのみちをたのしゆめ (五一-38)  
したるならなんぼからやとゆうたとて  
にほんのものにこれハかなわん (十一-6)  
これからハにほんのものハたんへと  
月日ひきたてこれをみていよ (十一-9)

「にほん」を強調しているこれらの歌のなかで、「から」と「にほん」の二分法図式の意味を正しく把握するキーワードは、「儘にする」「根」「こうぎ」「引き立てる」など動・名詞で表現された未開拓領域の学際的・実践的な現代的解釈であると思われる。ここにあらたな「にほん」の「ふでとりがくにん」の開拓する使命があるのではないか。そのふかい「しやん」を経て、はじめて「である」組織のあらたな「する」価値観の獲得とその実践決断行為や個人の普遍に通じる信仰体験が産出される。新天理教学の誕生である。そのためには「もの」を真に「こと」化させる「成る理」、つまり世界の天理教化の必要条件が抽出されなければならない。そこにはいままでとは逆転した、天理教内の質的世界化が筋道としてまず約束されねばならないであろう。「根」が現れば恐れ入るぞやという「言」の順序の意はこの点にあるのではないか。

松本滋は、つづけて本居宣長の思想的背景、宣長の「からごころ」批判、人知では測れない神の所行、宣長の「からごころ」と教祖の立場、「分ける」ことが重要、こうきは「鴻基」のこと?、親神の救済の対象はすべて、世界を広く見る『おふでさき』、と項目を分け、宣長の『古事記伝一』、「くずばな上」、「うひ山ふみ」などの関連する原書からの引用を含めて、『おふでさき』との思想的かつ構造的な共通点と相異点を克明に述べている。

まとめていえば、宣長の場合は『古事記』に伝えられた古伝説が絶対であり、それへの信仰が主張されているのに対して、教祖の場合は言うまでもなく元なる親神への信仰が説かれている。「元の理」は「記紀神話」とは全く異なる性質のものであり、教祖からすれば、後者を絶対視して信仰することは逆に「からごころ」になる。その歴史的証明は明治7、8年ごろの大和神社の神職たちとの問答にぴったりと対応している。明治5年に発布された「三条の教憲」により政府が民衆を指導していた動きの中に教祖の教えが説かれていた頃、呼び出された教祖の弟子たちに向かって神職たちは「記紀に見えない神名を唱えるは不都合である」と弁難し、後ほど直接教祖との問答において「…それが真なれば学問は嘘か」という問いに「学問にない古い九億九万六千年間のこと、世界に伝えたい」というのが教祖の返答である。このころ『おふでさき』では、「から」と「にほん」が集中して書かれている最中の出来事であった。宣長と教祖の「から」と「にほん」の二分法の図式は同じでも、その意味領域における軸は反・逆転している「こと」にも気づかされる。

とふぢんがにほんのぢいゝ入こんで  
まゝにするのが神のりいふく (二一-32)  
高山のしんのはしらハとふじんや  
これが大一神のりいふく (三一-57)  
上たるわなにもしらずにとふぢんを  
したがう心これがをかしい (四一-16)

「上たる」とは必ずしも「とふじん」ではなく、「にほん」の者でありながら親神の教えの「真実」を知らない「上たる」という解釈も成り立つ場合も無いとは言えないであろう。キーワードとしてある言葉のただしい解釈は時空間をこえる。「こと」と「もの」の既知概念の再認につづいて、未知であるその言葉の精神性を理解し吟味しなければならないのと同様である。そうでなければ、つまり日本の近代史観的領域に限定された解釈にとどまれば、あたらしい世代をふくめた未知の世界に挑戦する世界たすけ・異文化伝道は成立しないからである。